

特集 授業を活発にする「やりとり」の活動

生徒の「発信する力」を育てる授業づくり
—ディスカッション, ディベートにつなげる簡単な工夫—

山本 崇雄

(東京都立両国高等学校・附属中学校)

1. 「発信する力」の重要性

「英語でディスカッションやディベートができる」これは、国際社会で活躍する人材を育成するために、求められている力の1つである。しかしながら、これまでの日本の英語教育では、教科書の理解に指導の重点がおかれ、ディスカッションなどで、自分の意見を発信する指導は不十分であったと感じる。例えば、オーラルイントロダクションで、読む内容について丁寧な導入をし、新出語や文法を教え、読んで理解させる。進度に追われ、十分な表現活動をする時間がとれないまま次のレッスンに進む。その中で、受験指導も意識しなければならず、文法などの知識を教えることに追われる。どれも Teacher-centered (教師主導) になりがちで、生徒にとっては受動的な活動になってしまう。これではいつまでもディスカッションやディベートにつながる「発信する力」を養うことはできない。国際社会で活躍する人材を育てる観点から、もはや、中学で、ディスカッションやディベートを意識した指導をすることは避けられない。一方、これらの活動を指導することに難しさを感じている先生方も多い。そこで、本稿では、普段の指導をディスカッションやディベートにつなげる簡単な工夫を紹介したい。

2. 生徒が発信しやすい環境づくり

生徒が自分の考えを発信するには、Student-centered (生徒中心) の授業づくりが必要だ。生徒が発信することが当たり前の授業にしたい。これには、朝の学活から、他教科の授業、放課後の活動まで、Student-centered の考え方を、他の先生方と(できれば学校全体で)共有できるという。

例えば、朝学活では、連絡事項だけで終わることがないようにしたい。時間があれば、「右側の人は今朝食べた朝食について詳しく説明して下さい。左側の人はそれを聞いて褒めて下さい」や「左側の人は今日1日の時間割を説明して下さい。右側の人は、その中でがんばりたいことを1つ言って下さい」など、朝から「発信」する雰囲気を作ることができる。

他教科では、教わったことに対して、先生と生徒、生徒同士でやりとりをする時間を必ず確保してもらえるといい。このような、Active Learning の手法は、他教科から学ぶことも多いので、情報を共有し合い、良いものは英語の授業にも取り入れて行きたい。ただし、英語の授業では「英語で」行えるかが大切で、どんなに活発な活動でも、「英語で」できなければ、英語の授業にとってふさわしいタスクではない。

部活動でも、練習方法や課題など自分たちで考えさせる習慣をつけ、発信させる機会を与えると主体的な活動になる。

それぞれの学習活動における、生徒が持つ「自分の考え」「伝えたいこと」「理解したいこと」は、教師が教えることができず、生徒が自分で育てるものである。生徒に考える機会を与え続け、自分の考えを発信することが当たり前の雰囲気をつくりたい。生徒が発信しやすい環境づくりが、英語で「発信する力」を育てる土台になる。

3. 英語の授業で

それでは、英語の授業でディスカッションやディベートへの土台となる簡単な工夫を紹介したい。

(1) 教師の指示を確認する

40人学級で、全員に指示を行き渡らせることは

簡単ではない。そこで、指示を出した後に、“What did I say?” “What will you do next?” と指示を全員に確認するとよい。

例) 教師: I want you to read p.32 silently.

OK?

生徒: OK.

教師: So what should you do? Mr Tanaka?

生徒: You said, “Read page” Sorry, could you say that one more time?

(2) 生徒の発言について意見を求める

1年生など初期の段階では、生徒の発言に対して、“Is his answer right?” “Yes, it’s right.” のような簡単なものでよい。学年が進むにつれ、“What did he say?” “What do you think of Mr Tanaka’s opinion?” と踏み込んだ内容にしていく。ここで、“He said, ..., but I think / I agree with him. / I don’t agree with him.” といったディスカッションやディベートで使える表現を導入するとよい。

(3) 学習形態を生徒に選ばせる

指示をした後に、個人作業、ペア、グループといった学習形態を生徒に選ばせる。生徒に選ばせると、生徒が自分で選んだ責任を感じるようになる。

例) 教師: OK. Now check the vocabulary on p. 32. Do you want to do by yourself, in pairs or in groups?

生徒: In pairs.

教師: All right. What will you do?

生徒: We’ll check the vocabulary on p.32.

教師: How do you do it?

教師: In pairs.

教師: OK. I’ll give you 3 minutes.

(4) 教師の発問をペアワークに

教科書の内容の英問英答などの活動では、教師対一部の生徒のやりとりで終わってしまうことがある。そこで、以下のように、発問をそのままペアワークにするとよい。

例) 教師: What did Raj learn? OK? What is my question?

生徒: What did Raj learn?

教師: Good. So the students on the right side, ask this question to your partners. OK?

ペアワークにすることにより、全員が教師の発問に取り組むことになる。ペアワーク後に全体で答えを確認する際も、生徒は一度ペアでやりとりをしているので、自信を持って答えることができる。

(5) 教科書の Oral Presentation

Lessonの学習のゴールに、内容を英語でサマライズし、感想を言う Oral Presentation を置くとよい。初期の段階では、教科書の絵を使い、内容をリプロダクションすることに重点を置き、3年生では、自分の意見を言うことに重点を移して行きたい。

例えば中3の Lesson 8 では “English for Me” というタイトルで6人の生徒がスピーチをしている。その中で自分の意見に近いものを選び以下のように発表する。意見を引用し、自分の意見につなげる発表である。

例) Raj learned that he can use English to make friends. I agree with his opinion. English is used in many countries. If I can speak English, I can communicate with a lot of people

4. おわりに

ちなみに、今年の東京都高英研主催のディベートコンテストのB部門(初心者)の論題は “That Japanese high schools should abolish school uniforms.” である。中学校段階ではディベートまでいなくても、立論だけでもできると生徒もディベートをイメージしやすい。国語の先生と協力し、同じ論題でディベートに取り組んでも効果的である。立論、質疑応答、反駁、最終弁論といったディベートの流れと、それぞれの役割は日本語の方が理解しやすい。

このように、英語で「発信する力」を育てていくには、英語の授業だけでは難しく、他教科の協力も重要である。そして、授業の延長上にディスカッション、ディベートを意識し、生徒の「発信する力」を育てる活動を積極的に取り入れていきたい。